

を行い、124名(男88名、女36名)の回答を得た。

【結果】糖尿病外来での栄養指導は距離的のみならず、心理的にも近くなり、気楽に聞けるといふイメージがあり、75%の患者に好評であった。生活習慣が変わったと答えた患者は93%であった。検査項目ではHbA1cと体重の減少が有意であった。月別の変動をみても積極的介入を行わなかったH14年の同時期に比し、有意に低かった。栄養指導の希望回数は2~3カ月毎が多かった。

【結語】栄養指導室が近接したことにより積極的介入が可能となり、HbA1cの改善のみならず患者のQOLの改善に役立った。セルフケア行動が低い食事療法には積極的な頻回介入が必要、かつ有効と思われた。

3 超速効型インスリン治療への転換

高齢者への超速効型インスリン・ディスポーザブル製剤導入の効用

松田 香子・片桐 歩・青木 祥子
矢代 牧子・渡辺 七朗・八幡 和明
新潟県厚生連長岡中央総合病院薬剤部

【目的】手技の煩雑さや時間的制約から、導入を躊躇していた高齢の患者における超速効型インスリンのディスポーザブル製剤導入の効用について検討した。

【方法】2003年10月までに超速効型インスリンのディスポーザブル製剤での治療を導入した患者47人のうち、65歳以上の患者29人を対象とした。患者背景はカルテにて調査し、血糖コントロールの改善状況は導入方法、病型、罹患期間、注射回数及び併用薬剤で検討した。

【成績】対象患者29人のうちわけは、男15人、女14人。糖尿病型は1型2人(6.9%)、2型25人(86.2%)、その他2人(6.9%) (臍性、ステロイド性)。導入時の平均年齢は1型74.0才、2型72.6才、その他67.0才。罹患期間は1型12.0年、2型17.0年、その他0.7年。注射回数は、1回注射が12人、2回6人、3回10人、4回1人。導入時平均HbA1c評価群の改善度においては全体の平

均HbA1cは1.8%の改善、患者数では29人中24人(82.8%)が改善した。

【結語】罹患期間も長く、経口血糖降下剤だけではコントロールしきれない高血糖に陥った高齢者の患者に対して、超速効型インスリン治療の導入は血糖コントロールの改善に十分効果を発揮する事がわかった。

4 Madelung病(良性対称性脂肪腫)を合併した2型糖尿病患者の1例

山本 佳子・小田 雅人・戸谷 真紀
田村 紀子・田中 直史
新潟市民病院第2内科

症例は51歳の男性。既往歴としてアルコール依存症がある。

平成12年に頸部腫瘤が出現し摘除術を施行され、この時糖尿病と肝機能障害を指摘される。糖尿病に対しては1ヶ月で治療中断となった。平成15年10月に再び頸部腫瘤が出現し、耳鼻科にて高血糖・高脂血症を指摘され、術前コントロール目的に当科入院となった。前回の組織診断はリポーマであり、今回も画像診断よりリポーマであったためマデラング病と診断した。マデラング病とは良性対称性脂肪腫とも呼ばれ、現在までに約200症例の報告がある。非被包性皮下脂肪組織の進行性増殖が特徴で、主に首から肩にかけて対称性に脂肪が蓄積する疾患である。原因は不明であるが多くの症例は過去に大量の飲酒歴があり、糖尿病との関係も否定できない。本症例では糖尿病に対して内科的治療を行ったが、頸部腫瘤は軽快せず今後は手術予定である。今回まれな疾患を経験したので報告する。

5 糖尿病教育入院の体組成変化の評価

— インボディの結果から —

岡田 節朗・高橋 博幸

下越病院

【目的】糖尿病患者の教育入院中の筋肉量の変化を検討